

技術向上のための具体的な民主的組織論の教訓集

- ・「報告や発言は、一度に幾つかを言うのではなく、その時出された議題に対して一行でまとめて一つだけに」
次の人が発言した後、その意見に対して補足が有るのなら、また一行でまとめて一つだけにして議論をする習慣や訓練が出来るようになってほしいです。二つでは、困るのです。長台詞は、思いが強ければあって良いと思いますが、考えを一つにして強調してほしいのです。
- ・特技を有することは、スキー協が、クラブが、各指導員が生き残る手段です。

「へた（初心者でも、不器用な人でも）でも教えあう」は、これからのスキー協の発展にも繋がる基本理念の一つだと思えます

- ・ 教程書の滑りが出来るか出来ないかに焦点が当たりがちで出来ないのはどうしてなのか、これが出来なくて本当にこの先にどういう問題点が残るのか、出来ない人が出来るように何故なったのか、の経験の紹介と分析研究が足りない。・みんなは、それを求めている。他人頼りに。
- ・そこに焦点を当てたのが東海ブロック技術委員会での雪上の実践討論です。・その実践をまとめて出来たレポートの一つが「子どもと滑る」です。
- ・教程書の技術を理解できて仲間を糧に上手くなった人「教え合うが」習慣になっている人です。理解できなく、その機会の無い人は去っていった。
- ・「中途半端に上手い人ほど覚えた技術は排他的に隠そうとする」。
- ・各指導員がシーズ前に目標を決めて、技術レポートを出して発表することが、自分が育つ環境を自分で造ることになります。

上達の変化を感じられる特徴を持ったスポーツであることを思い出してください

- ・特に初心者は、出来ないことが確実に出来るようになるのが実感できるのだから今こそ初心者にスポットを当てるのがチャンスです。
- ・初心者に合う指導法が確立すれば、高齢者に使えます。
- ・教室という集団であるが故に、本人だけが自覚するだけですまない効果があります。比較できる対象サンプルがそこにいるわけです。立場もその都度、状況も代わります。
- ・基本的にほぼ同じレベルの人がいて、自分より先に出来る様になった人がいて、自分はちょっとコツがわかってきた人で、まだ出来てない人がいることが重要な土壌です。「松・竹・梅の個性ぶつかり理論」と呼んでいます。・教室は最低3人以上で編成してください。
- ・出来れば指導員も、タイプの違う人が複数いてほしいです。
- ・この瞬間に立ち会い「今出来たね」の声が、誰かから発することが有れば「教え合う芽吹き」です。指導員だけでは、裾野が広がりにません。
- ・出来たときに、的確に、良いタイミングで、短く簡潔に、色んな人に褒められれば、人は飛躍します。
- ・一人だけ出来ないで落ち込んだ時は、皆で「飴とチョコレートと甘い言葉」を食べて気分を切り替えます。あまりやり過ぎると少量で効かなくなるので「ドーピング」と呼んでいます。「たたいて、ほめる」「指摘とヨイショ」「飴と鞭」ではもらった方は、どちらが正解なのか判らなくなります。

自分で感じて、自分のものにして、人に伝えてこそ上手くなります

- ・自分の得意な技術を中心に伝えてください。出来ないことを目標にしないでください。自分が、人より少し先に行っていることを伝えてください。
- ・本人自身が意外と理解できない。他人からの視線で自分自身を見られたときに上手くなっている自分にやっと気がつく。
- ・本人の自分で感じた運動感覚と他人から観た運動の状態に違いがあるのがスキー技術の魅力。
- ・上達と共に、その違いが段々少なくなり、一致してくるから更に面白くなる。
- ・上記現象が観られ実感できるのが教室なのに教室という言葉には圧迫感や不自由感があり寄りつかない。それでは、助言を聞ける耳は持てません。
- ・その為の畏が緩斜面の、リフトに乗れば嫌でも目に入り、やれそうに思わせ、一緒にやりたくなるのが、拠点バーンなのです。

- ・自分自身は、そうでなくても子どもや孫や連れてきたパートナーがなびけば人の助言を聞き入れるチャンスはあります。
- ・そして教えられるのは嫌いでもアドバイスをするのは好きだったりします。その反対も然^{しか}りです。
- ・子どもを含めて、若い人、スキー協の後継者にそれが出来ていなかった。その環境を与えてあげられなかった。
- ・上手くならなくても、スキーをしているだけで十分な気持ちの人。ワンシーズンに何度も行けなくても満足している人の現場での要求は何でしょうか？そこに食い込めていないからスキー協にいる人の裾野が拡がり切れていないのです。
- ・それは、それに費やす時間と労力と熱意の維持力が少ないからです。
- ・一人で持てないものは、皆で共有すれば良いのであって、その解消の一つの光が、拠点スキー場を持つことです。その中で実践をかさねられれば新しい何かが見えてくるように思えました。
- ・「出来る人は出来ない人の悩みと気持ちと出来るようになった経過が理解できない」ことが案外多い。
- ・でもそれは、「はき出す場所や機会が無いだけ」なのかもしれない。
- ・拠点スキー場があって拠点スキーバーンがあって、初心者から上級者までが同じバーンで違う練習が出来れば「みんなで教え合う」ことが出来る。
- ・一緒にリフトに乗って、アドバイスができる。滑る人に注意がゆきわたる。リフトの上から指示やアドバイスが掛けやすい。
- ・当面の拠点練習方法が野麦峠のファミリーゲレンデのペアリフト下のメッシュポール練習です。
- ・そこにはクラブの旗があって加入を促す、リーフレットがあれば技術論と組織論と運動論が繋がります。

教え合う場に、「誘いあう」は、これからのスキー協の発展にも繋がる基本理念だと思えます

- ・「新人が新人を連れてくる」は、忘れてはいけない教訓です。
- ・「要求の一致は継続の原点」
- ・新しいクラブ作りをしてくれる仲間を見つけ、クラブを作るのが裾野を拡げる為に発見した、1番目の入り口です。
- ・指導員になってもらうのが2番目の入り口です。
- ・指導員やクラブ員を多くの行事に誘うが3番目の入り口です。(研修会、クラブ行事、技術委員会、レベルアップ行事、他クラブへの派遣)
- ・やめた指導員やクラブ員を復活させるが4番目の入り口です。(結婚や子育てでスキーが制限されることはあっても、同じ境遇の仲間クラブを作れば新しい仲間の輪が広がりました。)
- ・自分達の子どもや孫や家族をスキー狂にするが5番目の入り口です。
- ・会員をスキー協として育てるが6番目の入り口です。(役割と責任を持って活動してもらう)
- ・押し売りをしてでも教室を開くが7番目の新しい入り口です。
- ・「身体的な特徴も個性の一つです」それは、専門性の追求でもあります。克服の経験はスキー上達の特技です。
- ・「苦労は置き炭の表面、喜びは置き炭の芯、褒め言葉は風」
- ・「^{たの}楽しいは知性。スキー協は底辺の広い技術と万人の知性を磨こう」スキーだけで楽しいクラブであってほしくはないです。
- ・オフシーズンで実際に滑られないリスクはその分、頭でじっくり考えをまとめられるチャンスです。その「チャンスを皆で共有しましょう」
- ・それは、技術論、組織論、運動論のレポートを作成し、メイトや通信で発表することです。